

接続詞の接続領域の性質と認定基準 A Study on the Scope of Japanese Conjunctions

井伊 菜穂子

要旨

接続詞が意味的に結びつける文脈の範囲である接続領域については、従来論文ごとに独自の基準で認定が行われてきた。しかし、多くの種類の接続詞を対象とする場合、接続領域の性質をふまえた統一的な認定基準が必要になる。そこで、接続領域の性質と認定基準について考察し、次のことを明らかにした。第一に、接続領域の認定結果は複数の認定者間で高い割合で一致する一方で、判断が分かれる場合もあり、認定基準の曖昧さによる結果の不一致が生じない認定基準が必要であること。第二に、認定基準の曖昧さには、接続領域のタイプの違いによるものと、文脈理解過程における処理の広さの観点からみた接続詞のタイプの違いによるものがあること。接続領域のタイプには、接続詞が明示する接続関係を単独で構成しうる文脈の範囲である「主領域」と、主領域と併せたまとまりとしてのみ構成しうる文脈の範囲である「従属領域」があり、それぞれの定義を基準にして認定する必要がある。また、接続詞のタイプには「連続型」「飛石型」「断絶型」があり、主領域と従属領域の現れ方が異なることを指摘した。

キーワード：接続表現 機能領域 結束性 文段 焦点

1. はじめに

日本語学習者にとって、日本語レベルが上級であっても接続詞の使用は難しい（森本 2008）。作文での接続詞使用に着目した研究は多く、列挙の接続詞やまとめの接続詞など、文章構造と接続詞を連動させた有益な提言が多くなされている（俵山 2004、黄 2017 など）。

文章構造との関係で接続詞を使いこなすには、直前直後の局所的な文脈だけでなく、当該文脈において接続詞がどこからどこまでを結びつけているのか、広い範囲で見渡す意識が必要になる。とくに、日本語学習者に指導する場合は、接続詞が結びつけている範囲の認識の誤りにより文脈の理解に影響を及ぼす事例も確認されていることから（井伊・宮内 2020）、具体的にどのように意識すればいいかまで伝える必要があるだろう。

しかし、接続詞が意味的に結びつけている文脈の範囲である「接続領域 (scope)」¹については、塚原 (1968) の指摘を受け、近年注目する論文が増えてきている一方で（石黒ほか 2009、王 2015、砂川 2015 など）、未だ実態が明らかでない種類の接続詞も多い。また、

¹ 「機能領域」という用語を使用する先行研究が多いが（塚原 1970、石黒ほか 2009、王 2015）、ここでの「機能」という用語は言語学で一般的に使用される「機能 (function)」とは異なっていること、また、接続詞の性質を論じるときに欠かすことのできない「接続関係」(市川 1978) との名称の一貫性を考慮して、本稿では「接続領域」という用語を用いる。

接続領域を認定する際、どこまで範囲に含めるべきかという接続領域そのものの性質についての検討が不十分であり、原理的な基盤が共有されないまま各々の研究に応用されているのが現状である。そもそも接続領域は、複数の認定者間でどれくらい認定結果が一致するものなのか、接続領域がどのような性質を持つもので、多くの種類の接続詞に広く適用できるようにするためにはどのような認定基準を設けるべきなのか、研究への応用が広まりつつある現状だからこそ議論する必要があると考える。

そこで本稿では、接続詞の接続領域の性質を踏まえた上で、その認定基準を提案することを目的とし、以下の3点をリサーチクエスション(RQ)とする。

RQ1: 接続領域の認定結果は複数の認定者間でどれくらい一致するのか

RQ2: 認定基準の曖昧さにつながる要因は何か

RQ3: 認定基準の曖昧さによる結果の不一致を避け、多くの種類の接続詞に広く適用できるようにするためには、どのような認定基準を設ければいいか

2. 先行研究と本研究の位置づけ

接続領域の研究の必要性を最初に説いたのは、塚原(1968)である。塚原(1968)では、「接続詞の接続機能が、荷担する範囲——接続詞の機能領域についての配慮が欠如する」ことが問題視されている。続く塚原(1970)では、機能領域を「形態的な機能領域」と「意味的な機能領域」に分け、「形態的な接続機能の対象となる領域と意味的な接続機能の対象となる領域とは、一致することもあれば、一致しないこともある」ことが指摘されている。

塚原(1970)が指摘した2種類の機能領域のうち、主に意味的な機能領域に着目し、類似する接続詞の違いや文章展開の特徴を論じた研究が近年増加傾向にある。例えば、類似する接続詞の違いを論じた研究として、石黒(2001)、俵山(2007)、石黒ほか(2009)がある。石黒(2001)は、換言の接続詞「つまり」「すなわち」「要するに」のもつ前後の対称性の違いを、接続単位の特徴から明らかにしている。俵山(2007)は、「このように」と「要するに」の違いを、後続文脈に対する作用域の観点から論じている。なかでも、石黒ほか(2009)は、「あるいは」「したがって」「たとえば」「一方」を対象に、接続詞の種類と文章ジャンルによって機能領域がどのように変わるかを論じ、機能領域そのものの性質に言及した数少ない論文である。

また、文章展開の特徴を論じた研究としては、王(2015)と砂川(2015)が挙げられる。王(2015)は、「しかし」と「そこで」の機能領域が包摂関係にある場合を「遠隔共起」とし、接続詞の遠隔共起の概念が文脈展開パターンの解明に有効であることを明らかにしている。砂川(2015)は、日本語学習者の作文における談話構成員の習得過程を明らかにするため、逆接の接続詞が接続している範囲の大きさと、その範囲内での文章展開の特徴を論じている。

このように接続領域を分析観点としてとり入れた研究が増える一方で、より議論を深めるべき点が2点考えられる。一つは、認定基準について、原理的な検討が必要であるということである。現状では、論文によって接続領域の認定基準がさまざまである。また、先行研究では一部の形式を対象にしており、多くの種類の接続詞を広く対象にしようとした場合、統一的に測れる基準を設ける必要がある。とくに、石黒ほか(2009)における「直接的な影響下にある部分」と「間接的な影響下にある部分」、砂川(2015)における「特定の文が直前の文の内容を補充している場合は直前の文の接続範囲に含まれるが、新たな展開を行っている場合は含まれない」など、どこまで接続領域に含むかという点について論文ごとに見解が異なっており、議論が必要である。原理的な背景まで詳細に記述している論文に、「文段」(佐久間 2000 など)の概念を用いた王(2015)があるが、言語表現の面からだけでなく、意味の面から接続領域を認定するアプローチも必要だと考える。

議論を深めるべきもう一つの点は、接続領域は個々の文脈において必ず一つに定まるものなのか、検討する必要があるということである。先行研究では、1名あるいは2名の認定者で認定し、双方の判定が異なる場合は協議により決定する方法をとっている。分析する上で接続領域が一つに定まることを前提とすることも重要であるが、その前段階として、そもそも接続領域の認定が複数の人の間でどれくらい一致するものなのかを検討する必要があるのではないか。もし認定結果が複数の認定者間でばらつくことがあるのであれば、それ自体が接続領域の特徴であり、その違いが何によるのかも含めて検討する必要がある。

認定結果の一致度にかんして参考になる研究に、工学分野におけるテキスト構造解析の枠組みの一つ、修辞構造理論(RST, Rhetorical Structure Theory)がある。この理論においても、文章を構成する各文に対して最も関連の強い文の選択をしようとする、多くの人の解析結果が一致する部分と一致しない部分が存在することが指摘されている(竹内・松本 2001)。同論文での調査は接続詞の接続領域に特化した調査ではないが、テキストを構成する文同士の関係の認定が人によってずれる場合があるという結果は、本稿と決して無関係ではない。接続詞の接続領域の場合も文同士の関係の認定と同様に、認定結果が一致しない可能性が十分に考えられる。

そこで、次の3節では、接続領域という概念を立てる意義について述べた上で、接続領域の認定結果は複数の認定者間で基本的に一致するものの、一部意見が分かれる場合もあることを述べる。そのうえで4節と5節では、意見が分かれる要因の一つである認定基準の曖昧さについて考察し、認定基準の提案を行う。

3. 接続領域という概念を立てる意義

接続領域の性質について考えるにあたって、はじめに接続領域という概念を立てる意義について述べる。まず、一つ目の意義として、接続詞の接続領域は文脈処理過程における処理の広さと深いかわりがある、ということがある。

文章を読むという行為は、基本的には、線条的に配列された文章を、配列された順に冒頭から読み進めていく行為である。その過程で読み手は、文章を線条的なままでなく、意味的なまとまりを形成しながら、あるいは形成しようとしながら理解し読み進めていく。

文章の一部あるいは全体を意味的なまとまりとして理解する過程では、2種類の処理が並行して行われていると考えられる。一つはボトムアップ処理、もう一つはトップダウン処理である。ボトムアップ処理は、今まさに読んでいる展開の中で、直前直後の局所的な理解を積み上げていく、狭い範囲を対象とした処理である。トップダウン処理は、これから読む内容やこれまで読んできた内容全体を俯瞰的に見渡す、広い範囲を対象とした処理である。実際の理解過程では、ボトムアップ処理における局所的な理解から意味的なまとまりを形成していき、トップダウン的な理解に結びつけていったり、反対にトップダウン処理における俯瞰的な理解が局所的な部分の理解を助けたりするように、二つの処理が並行して行われていると考えられる。

この2種類の処理と接続詞との関係を考えてとき、文脈を理解する過程における処理の広さは、接続詞による結束性の明示がどれくらいの範囲にわたってなされているかということと深いかわりがある。接続詞と結束性との関係について、Halliday & Hasan(1976)が「結束性は *afterwards* という接続表現によって表されているけれども、実際に結束力をもつのは、その根底にある時間的継起という意味関係である」と述べているように、接続詞はあくまで結束性が存在することを明示するものであり、結束性を生じさせるものではない。しかし、ボトムアップ処理にかかわる局所的な結束性を明示するのか、あるいはトップダウン処理にかかわる広い範囲での結束性を明示するのかという点で、文脈を理解する過程における処理の広さと接続詞による結束性の明示はかわりがあると考えられる。

ボトムアップ処理とトップダウン処理それぞれの過程において接続詞が機能しているとする、全ての接続詞が同じ性質を持つわけではなく、狭い範囲でのボトムアップ処理の中でとくに機能するタイプの接続詞と、広い範囲でのトップダウン処理の中でとくに機能するタイプの接続詞があることが予想される。それを知るための指標として、接続領域の研究が役に立つと考えられる。

また、二つ目の意義として、接続領域は文章の情報構造やワーキングメモリとも深くかわる概念である、ということがある。一つの接続領域が、全て同じ重要度の文で構成されているとは限らない。例えば、文章を読む過程で接続詞「また」にたどりついたときに、先行文脈にあたる意味的なまとまりを一言一句覚えているとは考えにくく、このとき想起されるのは、「段」における「中心文」(佐久間 2000 など)のような、まとまりの意味内容を端的に表すものではないだろうか。接続領域内の全ての文が平等な扱いを受けるわけではなく、他の文と比べて「卓立性」(池上 1982)を有する文が存在するとすれば、接続領域は文章の情報構造やワーキングメモリとの関連からも論じるべきものであると考えられる。

以上から、接続詞の接続領域という概念を立て研究することは、文章を理解する過程で

意味的まとまりをどのように形成しているのかということの解明に役立つだろう。

それでは、そもそも接続領域とは研究対象たりうるくらいの共通認識に支えられ、個々の文脈の中で一つに定められるものなのだろうか。ここで、以下のデータを見てほしい。

表 1 論文における接続詞「また」の接続領域の認定結果

一致人数	先行文脈		後続文脈	
	件数	割合(%)	件数	割合(%)
5名一致	35	41.18	45	52.94
4名一致	21	24.71	21	24.71
3名一致	24	28.24	13	15.29
2名一致	5	5.88	6	7.06
一致なし	0	0.00	0	0.00
合計	85	100.00	85	100.00

表 1 は、筆者が試みに、学会誌『日本語教育』の論文 10 本を材料文として、本文の文頭で使用されている接続詞「また」の接続領域を、5 名の日本語母語話者で認定した結果である²。表 1 を見ると、5 名中 5 名全員一致する場合だけでも半数前後が一致しており、4 名一致の場合を加えると、先行文脈の接続領域が一致率約 66%、後続文脈の接続領域が一致率約 78%で、7 割前後が一致している。また、「一致なし」が 0 件であり、認定者全員の意見がばらつくことはない。このことから、複数の認定者間で接続領域の認定結果が一致することを前提として研究する方法が可能であると言えるだろう。一方で、意見が分かれる場合も存在する。そこには一体どのような要因が働いているのだろうか。

認定結果について意見が分かれる要因には、接続詞が使用されている文脈による場合と、認定基準の曖昧さによる場合が考えられる。前者については、接続領域そのものの性質を物語っていると考えられ、研究対象とすべきであるが、後者についてはできるだけ避けるべきであると考えられる。後者の認定基準の曖昧さを避けるためには、先の議論ともかかわる、「文脈理解過程における処理の広さの観点からみた接続詞のタイプ」と「接続領域のタイプ」の二つを考慮する必要がある。それぞれ 4 節と 5 節で見していきたい。

4. 文脈理解過程における処理の広さの観点からみた接続詞のタイプ

接続詞は、文脈理解過程におけるボトムアップ処理とトップダウン処理との関係からみていくと、三つのタイプに分類することができる。それぞれ接続領域の内部構造が異なる

² 次に述べる認定基準に従って、認定者 5 名それぞれが独立して作業を行った。まず、基本的な認定基準として、共通の話題に対して「また」が同じ階層で並べ立てている複数の事柄を接続領域として認定した。また、補足的な認定基準として、三つ以上の事柄を並べ立てている場合は、「また」の直前直後の事柄のみ認定した。

ことから、多くの種類の接続詞に広く適用できるような統一的な認定基準を設定するためには考慮すべき点であると考えられる。そこで本節では、先行研究の記述を参考にしながら、文脈理解過程における処理の広さの観点からみた接続詞のタイプを「連続型」「飛石型」「断絶型」の3種に分け、その特徴を論じる³。

4.1 連続型の接続詞

塚原(1970)と石黒ほか(2009)における記述を見ると、例に挙げられている接続詞の種類によって、接続領域の捉え方に異なる特徴が見られる。その違いとは、ある接続詞の接続領域の開始位置を考える際に、まず直前の文脈からの流れを意識するか、あるいは接続詞から離れた位置にある先行文脈に意識を向けるかの違いである。ここではまず、直前の文脈からの流れを意識する「連続型」の接続詞について見ていく。

塚原(1970)は、接続詞「けれども」が使用されている以下の例文(1)を挙げ、(A)(B)と(C)は「けれども」の形態的な機能領域、(B)と(C)(D)は「けれども」の意味的な機能領域であるとしている。とくに意味的な機能領域について、(B)と(C)は「接続詞『けれども』が表現して規定する逆態接続の関係で呼応する」箇所であり、(D)は「傍線部(C)が表現する事柄を、具体的に解説する表現である。すなわち、傍線部(D)の表現対象となる素材概念は、傍線部(C)の表現対象となる素材概念に包摂されることとなる」とし、意味的な機能領域に認定しなければならないとしている。なお、「具体的に解説する表現」以外にも「表現対象となる素材概念に包摂される」表現があるのか否か、あるとしたらどのような表現が想定されるのかまでは言及されていない。

- (1) (A) 袂で顔を掩うしぐさや、立って出てゆこうとした動作に、(B) 幼ない武高
ななえの印象が思いうかんだのである。 **けれども** (C) それが事実とは考えられ
なかった。 (D) 武高は子だくさんで貧しく、阿部の家へひそかに米や塩、味噌な
どから小銭まで借りに来たし、亥の年の騒ぎのあと、あるじの又兵衛が急死して
から、二男の伊之助は百姓へ養子にやり、幼ない娘二人もどこかへやられた。あ
とには長男の又三郎とななえだけが残り、やはり貧しい生活に追われていたよう
だ。それにしても、徒士組の微禄な身分ながら侍は侍だから、娘を芸妓にするよ
うなことはないだろう、おれの勘ちがいた、と彼は思った。 (塚原 1970)

ここで着目したいのは、意味的な接続領域(B)(C)(D)が、接続詞「けれども」をはさんと連続的に流れている点である。直前に位置する文脈を受けて、接続詞の属する文脈と結びつける、ボトムアップ処理と一致した捉え方になっている。

³ 前節で述べた「中心文」「卓立性」と接続領域との関係や、本節で述べる接続詞の3タイプの分け方・用語については、石黒圭氏から口頭による多くの助言を得ている。

石黒ほか(2009)でも、『A.しかし、B。C。D。』という連続する4文があった場合、形態的な接続機能としては『A.しかし、B。』で完結していたとしても、文C、文Dも『しかし、B。』で示された逆接の流れのなかであれば、後項の意味的な機能領域は『B。C。D。』の3文と考えざるをえない」と注釈がなされている。これも塚原(1970)と同様、直前直後の文脈が連続的に結びついている例であり、さらにそれを起点にどこまで間接的に接続領域が広がっていくかを捉える視点が見える記述である。

以上のように、直前直後に位置する文脈を接続領域として捉えやすく、それを起点にどこまで範囲に含むか外に広げていく視点を持つタイプの接続詞を、連続型の接続詞と呼ぶ。連続型の接続詞は、ボトムアップ処理との関係が強く、接続領域が狭くなることが予想される。接続領域の認定の際は、起点となる範囲は認定しやすい一方で、どこまで範囲に含むかの判断が曖昧になりやすく、明確な基準が必要である。具体的な基準は5節で述べる。

4.2 飛石型の接続詞

次に、接続詞から離れた位置にある文脈との結びつきが強い「飛石型」の接続詞について述べる。石黒ほか(2009)では、「一方」が使用された例文(2)を挙げ、【】を「一方」の「直接的な影響下にある部分」、《》を「間接的な影響下にある部分」としている。

- (2) 「水害サミット」では(1)水害に関する客観的な情報を速やかに入手し、分析する方策(2)住民に避難、災害情報を正確に、かつ確実に伝える伝達手段(3)住民を安全、確実に避難場所に移動する方策(4)要介護者を避難させる役割の分担——を中心に論議された。

《【呼びかけ人でもある新潟県見附市の久住時男市長は、昨年夏の豪雨災害時での教訓から、次のような措置を講じたことを報告した。】5カ所で破堤、2000戸以上が浸水した刈谷田川の水位を上流の栃尾市を含め6カ所で計測し、刈谷田川ダムの貯水、流入、放水量とともにいずれもリアルタイムで入手できるシステムを構築。民間気象情報会社からのピンポイントの気象情報を併せて、危険度を客観的に判断できるようにした。

さらに、市内全町内の代表者宅にファクスを設置、緊急時での住民への情報伝達手段とした。》

【一方】，《【昨年秋の台風で7人が死亡し、1万戸以上が浸水した兵庫県豊岡市の中貝宗治市長は、その教訓を踏まえた対策を提唱した。】

「心理学的にも災害でも人はなかなか自宅から避難したがる。避難をスムーズに展開するには随時、災害情報を的確な言葉で細かく伝え、市民の関心を高めていく必要がある」「各消防団ごとに情報収集責任者を任命した。一刻も早い勧告や指示を出すには、信頼できる情報が必要だ。そのためには情報の一

元化が必要だ》

(石黒ほか 2009)

ここで着目したいのは、「一方」の先行文脈の「直接的な影響下にある部分」、つまり「呼びかけ人でもある新潟県見附市の久住時男市長は、昨年夏の豪雨災害時での教訓から、次のような措置を講じたことを報告した。」の文が、「一方」から離れた箇所位置に位置することである。前項 4.1 の連続型の接続詞とは異なり、前後の文脈を広く見て、形態的に離れた位置にある文同士を「一方」が明示する対比関係にあると判断した例である。

このように、接続詞から離れた位置にある先行文脈との結びつきが強いタイプの接続詞を、飛石型の接続詞と呼ぶ。飛石型の接続詞は、トップダウン処理との関係が強く、接続領域が広がることが予想される。

文章を線条的に読む過程を考えれば、連続型のように直前直後の文脈を結びつけるのが自然な流れのように思える。それにもかかわらず、飛石型の接続詞が直前の文脈と直接結びつかないのは、先行文脈の中で「直接的な影響下にある部分」が、接続領域内の他の部分に比べて意味的に卓立性 (saliency) を有しているためと考えられる。これは、接続領域内の焦点 (focus) ⁴にあたるとも言える。飛石型の接続詞の接続領域は、前後それぞれの接続領域の焦点が起点となって、焦点にあたる部分に関係のある文が「間接的な影響下にある部分」として後ろに続く構造になっている。飛石型という名称は、先行文脈の「直接的な影響下にある部分」と後続文脈の「直接的な影響下にある部分」を前後それぞれの接続領域の焦点と考えた場合、焦点と焦点の位置関係が飛び石的になっていることによる。

接続領域の認定の際は、連続型とは反対に、どこを接続領域の開始地点と考えるかが困難になると考えられ、明確な基準を設けることが必要である。

4.3 断絶型の接続詞

最後に、これまで述べた連続型の接続詞にも飛石型の接続詞にもあてはまらないタイプの接続詞を見ていきたい。

飛石型の接続詞よりもさらに連続性が低くなり、意味的なまとまりの明示よりも、まとまり同士の切れ目を示すことに重きが置かれた接続詞が、「断絶型」の接続詞である。例えば、市川 (1978) で「転換型」とされる「さて」「ところで」などの接続詞が該当すると予想される。断絶型の接続詞は、大きい話題レベルでの接続領域は考えられるかもしれないが、連続型の接続詞や飛石型の接続詞と同じレベルで、範囲としての認定基準を考えると困難であると考えられる。断絶型の接続詞の接続領域をどのように考えるべきかについては今後の課題としたい。

⁴ 「焦点 (focus)」という用語は、テキスト論の立場から、接続詞の接続領域内で卓立性を持つ箇所に着目し使用しており、情報構造論において一文内の情報を対象に使用する場合はその点で異なっている。

4.4 接続詞のタイプのまとめ

これまでの議論から、文脈理解過程における処理の広さの観点からみた接続詞のタイプは表 2 のように整理できる。

表 2 文脈理解過程における処理の広さの観点からみた接続詞のタイプ

	先行文脈の接続領域内の 焦点の位置	文脈理解過程において 関係が深い処理	接続領域を認定する際の 困難点
連続型	接続詞の直前	ボトムアップ処理	どこまで広がるか
飛石型	接続詞から離れた位置	トップダウン処理	どこから始まるか
断絶型	接続領域自体を想定しにくい		

なお、「しかし」が逆接用法や対比用法、転換用法など複数の用法を持つように、連続型、飛石型、断絶型の接続詞は完全な線引きが常にできるわけではない。しかし、接続領域の内部構造が異なることから、接続詞のタイプによる接続領域の特徴の違いは認定基準を考えるにあたって考慮する必要があると考える。

5. 接続領域のタイプと認定基準

前節では、接続領域の内部に、焦点にあたる卓立性を有する箇所と、そうでない箇所がある様子が見られた。両者の区別につながる指摘として、前節で述べたように、石黒ほか(2009)による「直接的な影響下にある部分」と「間接的な影響下にある部分」の区別がある。石黒ほか(2009)の指摘は、接続領域内の構造を把握し、接続領域の認定基準を設定するうえで非常に重要なものであるが、同論文では両者を区別する基準は明記されておらず、実際の分析も両者を分けずに行われている。そこで本節では、接続領域の下位分類についてそれぞれの性質を論じた上で、どのような認定基準を設ければ、連続型と飛石型の接続詞の接続領域を統一的な基準で測れるかについて考察する。

まず、接続領域内の焦点にあたる箇所について、前掲の例文(2)を用いて考えていきたい。例文(2)では、「直接的な影響下にある部分」とされる【 】で括られた部分が卓立性を有することを述べた。この箇所の特徴は、接続領域内の残りの部分を除いて単独で考えても、接続詞「一方」が属する文と対比関係で結びつくことである。砂川(2015)は、「直前の文」を補充する内容か否かを基準としており、前件との関係を基準として明記していないが、前後のつながりを見ることは接続詞の機能を考えたときに欠かせない基準である。

次に、焦点以外の箇所について考えていく。例文(2)では、「間接的な影響下にある部分」とされる、《 》で括られた箇所が該当箇所である。この箇所では、例えば接続詞「一方」の直前の文「さらに、市内全町内の代表者宅にファクスを設置、緊急時での住民への情報伝達手段とした。」は、「一方」が属する文「昨年秋の台風で7人が死亡し、1万戸以

上が浸水した兵庫県豊岡市の中貝宗治市長は、その教訓を踏まえた対策を提唱した。」と単独で対比関係にあるとは考えにくい点で、先ほどの焦点にあたる箇所とは異なっている。

以上から、接続詞が明示する接続関係を単独で構成することができるか否かという点から、接続領域を2種類に分けられそうである。すなわち、接続詞が明示する接続関係を単独で構成しうる文脈の範囲と、単独で構成することができない文脈の範囲の2種である。本稿では、前者を「主領域」、後者を「従属領域」と呼ぶ。このような用語を用いるのは、単独で構成しうるか否かという点に着目しているためである。

ただし、従属領域の規定はこれだけでは不足している。接続領域に含まれない文との差が規定できないためである。ここで重要になるのが、従属領域にあたる箇所は、接続詞が明示する接続関係と無関係なわけではなく、主領域と一緒にまとまりとして見ると、接続詞が明示する接続関係で結びつけられるということである。

ここで、前節における接続詞のタイプについての議論を振り返ると、連続型の接続詞は直前直後の文が焦点になりやすく、それを起点にどこまで範囲が広がるのかが認定の際に難しくなるという特徴があった。つまり、主領域は認定しやすいが、従属領域の認定は困難であるということである。一方、飛石型の接続詞は、主領域が離れた位置にあり、前後それぞれの主領域が起点となって、後ろに従属領域が続く構造になるという特徴があった。その場合、前後がそれぞれ「主領域+従属領域」のまとまりとして対称的な構造になることが考えられる。主領域を探すときは広い範囲にわたって見渡す必要があるが、従属領域については対称性を頼りに探すことができる分、連続型の接続詞よりも認定しやすいことが予想される。そこで、従属領域の認定が曖昧になりがちな連続型についても、飛石型と同様、「主領域+従属領域」の意味的なまとまりとして当該接続関係で結びつけられるかという基準を設けることで、統一的で明確な基準を設けることができると考える。

したがって、主領域と従属領域は、以下のように定義することができる。

主領域：接続詞が明示する接続関係を単独で構成しうる文脈の範囲

従属領域：接続詞が明示する接続関係を主領域と併せたまとまりとしてのみ構成しうる文脈の範囲

とくに主領域は、接続領域の中で卓立性を持つ焦点にあたる箇所である。

接続領域を認定する際は、主領域と従属領域に分け、それぞれの定義にあてはまるかを基準に認定することによって、連続型の接続詞も飛石型の接続詞も統一的に、かつ認定基準の曖昧さによる不一致をできるだけ回避した認定を行うことができると考える。

なお、常に前後の接続関係が明確であるとは限らない。例えば、「しかし」の前後が逆接の接続関係とは読めないような場合も中にはあるだろう。これは、認定基準の曖昧さとは異なる問題であると考えられ、認定困難なデータとして扱うなど別の対処が必要である。

6. おわりに

本稿では接続詞の接続領域の性質と認定基準について考察し、RQ にしたがって次の 3 点を明らかにした。

まず、RQ1 について、接続領域の認定結果は複数の認定者間で高い割合で一致する一方で、判断が分かれる場合もあり、認定基準の曖昧さによる結果の不一致が生じない認定基準が必要であること。次に、RQ2 について、認定基準の曖昧さには、接続詞のタイプの違いによるものと、接続領域のタイプの違いによるものがあること。また、接続詞は、文脈理解過程における処理の広さの観点から、連続型、飛石型、断絶型の三つのタイプに分かれ、それぞれ主領域と従属領域という接続領域のタイプの現れ方が異なること。そして、RQ3 について、主領域の認定は、接続詞が明示する接続関係を単独で構成しうるかという点から、従属領域の認定は、接続詞が明示する接続関係を主領域と併せたまとまりとして構成しうるかという点から判断する必要があるということである。

本稿では、接続詞を文脈理解過程における処理の広さの観点から 3 タイプに分けて示したが、石黒ほか (2009) が指摘するように、同じ接続詞でも使用される個々の文脈によって接続領域の広狭は変わってくると考えられる。しかし、文脈による差はあっても、接続詞の種類や用法によって狭い範囲を結びつけやすい、あるいは広い範囲を結びつけやすいという傾向が明らかになれば、教育現場でもタイプ別に分けた指導がしやすくなるだろう。

今後は、本稿で定めた基準に基づき、多くの種類の接続詞を対象とした接続領域の研究を行い、接続領域の観点からみた接続詞の全体像を明らかにする研究につなげていきたい。

付記

本稿を執筆するにあたり、指導教員である石黒圭先生、本誌査読者の方より、多くの有益なご意見を賜りました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 井伊菜穂子・宮内拓也 (2020) 「接続詞による文脈理解の方法」石黒圭 (編) 『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究 —学習者の母語から捉えた日本語理解の姿—』 pp.143-168、ひつじ書房
- 池上嘉彦 (1982) 「テキストとテキストの構造」『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 I』 pp.7-41
- 石黒圭 (2001) 「換言を表す接続語について —『すなわち』『つまり』『要するに』を中心に—」『日本語教育』 110、 pp.32-41
- 石黒圭・阿保さみ枝・佐川祥予・中村紗弥子 (2009) 「接続詞の機能領域について」『言語文化』 46、 pp.79-94
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』 教育出版

- 王金博(2015)「論説文における接続表現の『遠隔共起』についての研究—新聞社説の『しかし』と『そこで』を中心に—」博士学位取得論文
- 黄明侠(2017)「流れがスムーズになる序列構造の示し方」山内博之(監)、石黒圭(編)『わかりやすく書ける作文シラバス』pp.159-177、くろしお出版
- 佐久間まゆみ(2000)「日本語の文章・談話における『段』の構造と機能」『平成9年度～11年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書』開成出版
- 砂川有里子(2015)「逆接の接続詞と談話構成力の習得—日本語学習者の縦断的な作文コーパスを活用して—」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三(編)『文法・談話研究と日本語教育の接点』pp.285-317、くろしお出版
- 竹内和広・松本裕治(2001)「新聞報道記事に対するテキスト構造解析の傾向とその手がかり情報の検討—人間によるテキスト構造解析実験をもとに—」『計量言語学』22-8、pp.319-334
- 俵山雄司(2004)「接続詞の指導について—『指示語を含む複合接続詞』と『談話を構造化する接続詞』—」筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース『筑波応用言語学研究』11、pp.97-110
- 俵山雄司(2007)「『このように』の意味と用法—談話をまとめる機能に着目して—」『日本語文法』7-2、pp.205-221
- 塚原鉄雄(1968)「接続詞」『月刊文法』1-1、pp.39-43
- 塚原鉄雄(1970)「接続詞—その機能の特殊性—」『月刊文法』2-12、pp.10-18
- 森本郁代(2008)「談話内の接続関係の理解における接続表現の必要性—日本語学習者に対する作文教育への応用に向けて—」『日中言語研究と日本語教育 創刊号』pp.93-104
- Halliday, M.A.K. & R.Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman. / 安藤貞雄・多田保行・永田達男・中川憲・高口圭轉(訳)(1997)『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性—』ひつじ書房

(いい なほこ 一橋大学大学院博士後期課程)